ボクちゃんの戦場

奥田継夫作■しらい・みのる絵

理論社刊／JUNIOR LIBRARY

ボクちゃんの戦場

奥田継夫作■しらい・みのる絵

理論社刊／JUNIOR LIBRARY

913／ボクちゃんの戦場
奥田継夫（おくだ・つぐお）
理論社／1969年初版
284p／23cm／菊判

ボクちゃんの戦場
PUBLISHED BY RIRON-SHA LTD.
一九六九年一二月　第一刷 ©
作　者　奥田継夫
発行者　小宮山量平
東京都千代田区神田神保町一の64
発行所　株式会社　理論社
東京都新宿区若松町一〇四
電話（二〇三）五七九一〔代〕
振替東京九五七三六

I 大阪から

まえがきにかえて・1

Ⅰ 大阪から 5

集団疎開・6——勝つまで・7——《学童鍛練展開》・11——身体検査・13——最後の決断・17——異様な雰囲気・19——四年男女組・21——大喧嘩・23——荷づくり・27——荷物運びの日・30——お母ちゃん・32——壮行式・36——別離・37——車中の出来事・38

Ⅱ 観松楼 45

島根県大原郡加茂町・46——班分け・47——初めての晩ごはん・49——帰りたい・53——その朝の出来事・56——第一信・59——水の音・61——三十七人の乞食・63——郷愁病・67——演芸会・68——嘲笑・70——帽子とり・72——乱闘・76——作戦会議・77——テニヤン玉砕・81——小さな悪魔・84——面会・87——移転・89

Ⅲ 慶用寺 91

冬の巻

おもしろい出来事・92——警戒警報発令・95——冬仕度・97——石高制・100——追跡さる・103——失意・106——お父さんの手紙・108——石高制の威力・113——小包・115——明暗・121——幻を追って・124——シラミの歌・128——餅つきの夜の出来事・132

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅳ 慶用寺

春の巻

137

悲しいお正月・138——楽しい作文・143——腕力と度胸・145——級長選挙・149——奮起・155——前ぶれ・156——送別会のけいこ・158——大事件・162——コエたごさらい・164——マンジュウの計算・168——駅頭のお別れ・171——ア！お母ちゃん・174——二日目・176——非常点呼・179——全焼・181——悪夢・185——おかしなこと・187——恐ろしい話・189——五年生・193——$\frac{1}{4}$のこせ・197

Ⅴ 東林寺（とうりんじ）

201

異常あり！・202——ヤッツケニ行ケ・206——質問の矢・208——第二陣・212——島根新聞・215——あいつの正体・220——それから・224——陰謀・226——危機一髪・229——小さい盗賊たち・232——マルコの死・235——買出し・240——秘密の会合・244——夕焼け・248——螢狩り・251——決行まで・255——最後の夜・256——ボクちゃん対牧野君・258——決行の日・262

Ⅵ ふたたび大阪へ

267

焼け跡・268——黒いまっすぐな煙・272——絶唱・275——また、どなりはじめた・279

あとがきにかえて・280

そうてい・さしえ――しらい・みのる

I 大阪から

1　集団疎開

「先生。集団疎開ちゅうのは、遠足みたいなもんですか？」
めがねをかけた小川君がきいた。
「ちゃいますネ。泊まるさかい、修学旅行や」
鯛あたまの高村君がこたえた。
「長い長い汽車に乗って……」
渡利先生がおっしゃった。
「長い長い汽車に乗って……」
みんなは息をつめて、先生の口もとをみつめた。
「遠い遠い田舎へ行って……」
「……」
「毎日、毎日」
「毎日、毎日？」
「来る日も、来る日も」
「どないするッですか？」
「泊まるッや」
「賛成ぇ！」
「誰や？　人より二倍半、大きい声、だしたッは？」

「ガンちゃんです」
「白岩。おまえ、集団疎開に行くか？」
「ハイっ」――ガンちゃんこと、白岩岩次郎君は元気いっぱいの返事をした。
「そやけど先生。こんなぎょうさんどこへ泊まるッですか？」
「お寺や」
「お寺か！」
「こわいッか？」
先生が高笑いされたとき、
「先生。肝試し、しまひょ。おれ、墓の中で寝てこますゾ」
朝比奈君が言った。
「わしは、いやや」
「誰や？　わしという汚い言葉、使こたンは？」
「すッません」
高村君がしきりにベロをだした。
「行儀わるいこと、すッな」
「先生。わしのベロは、もとへ！ボクの舌は悲しいときと嬉しいときにでよります」

「けったいなベロやナ」
「ベロ、ベロ。わしみたいな汚い言葉、なんで使こてッ？はよ先生にあやまってしまえ」
爆笑がおこった。しかし、源久志君こと、ボクちゃんは、先生が来る日も来る日もとおっしゃったころから、遠い遠い田舎のこわいこわいお寺で寝て、いったいお母ちゃんはどうなるかということを考えていた。
「先生ぇ！」
ボクちゃんはみんなの哄笑を覚悟して、声をかけた。
「お母ちゃんもいっしょに泊まるッですか？」
言ったとたん、新しい笑いの玉が爆発した。
「源さんはまだお母ちゃんの乳、吸うてッのッか？」
「源はいつもえらそうな顔してるけど、あかんたれやナ」
方ぼうから嘲笑がとんだ。ボクちゃんはまっ赤な顔をして、うつむいた。
ボクちゃんの顔はそうでなくても、女の子のように白く丸かったので、隣りに坐っている副級長の小林君など、いつ赤い月がでたのかとさえ思った。渡利先生はまじめな表情をとりもどされた。
「先生はな、誰がそれをきいてくれるか、待っていたッだ。みんな、集団疎開はナ、ほんまに、何日も何日もお母さんのもとを離れて生活するッだ。お母さんとはしばらく会えないッだ」

2　勝つまで

「何日ぐらい会えないッですか？」
たった今、ボクちゃんをからかった久代君がきいた。
「百日だ」
「たった百日か」
久代君は調子をとりもどした。
「いや、百五十日。二百日。三百日。一年」
「そのあいだぜんぶ、お母ちゃんに会えないッですか？」
小川君もきいた。
「お母ちゃんはなッで集団疎開について来てくれはれへッのですか？」
高村君もきいた。
「なッで、集団疎開に行くッですか？」
小林君もきいた。
「そうだナ」
先生はその四角い顔をちょっと天井にお向けになった。

「みんなも知っているように、この戦争は長期決戦だ。こないだもサイパン島が陥ち、戦局が重大化した。鬼畜米英は日本の何百倍もある大きな国だ。いくら日本の兵隊さんが強く、天皇陛下がおえらくあらせられても容易には勝てない。だけれども、戦争には勝たねばならぬ。勝たねば、皇国日本はどうなる？　我々臣草はどうなる？」

ボクちゃんは手をあげた。ボクちゃんは戦争の話をきくと、女の子のような体が、チンポコのようにピン！と張りきるのだった。

「源。言うてみィ」

「米英はボクらみたいな、いとけない子どもを殺して、ムシャムシャ食べます」

誰も笑わなかった。

「食べられないためには、どうする？」

「勝たねばなりません」

「勝つためには、どうする？」

「……？」

「どないした？　おまえはみんなの力で戦争を勝たしたくないのか？　子どもみんなの力でだ」

先生は教室を見わたされた。軍艦や飛行機の絵がいたるところに帳りだされ、《ほしがりません、勝つまでは》などの習字も目についた。窓に近いところに小川芳明君がうつむいていた。

「小川。どないしたら、勝てるッだ？」

「ぼく、毎朝、水をかむったら、エエと思います」

「なッでだ？」

「乃木大将は少年のころ体が弱かったけど、冬でも水をかむって体をきたえ、日露戦争で大勝利をおさめられました」

「よし。ほかに誰か？　源はまだわからッのか？」

ボクちゃんはイライラした。今までどんなむずかしい算数の答でも、先生に指名されれば、わけもなくわかった。〈そやのに……〉と、ボクちゃんは級長のてまえ、何か答えなければならないと決心して、立ちあがった。

「あのぅ……」

先生は耳をかたむけられた。

お母さんのことをボクちゃんがきいてくれたと同じように、この答を生徒がだしてくれれば、どれだけ気持が楽になることか？

「……ん？」

「そのぅ……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ボクちゃんは恥ずかしかった。頭のなかで胸にさげている赤い桜型の記章がクルクルまわった。

「よっしゃ。先生が言おう」

渡利先生はボクちゃんを右手で制せられ、「集団疎開にいくことだ」と、おっしゃった。

「なッや！」

「なッやて、なッや？　そッなら、なぜ、集団疎開にいったら、戦争に勝つか？　その理由がわかるか？」

今度こそ答えようとした。

「わからッかナぁ？」

ボクちゃんは呪文をとなえた。しかし、答はでてこなかった。

「先生は今戦争に勝つために集団疎開にいくと言った。逆に考えてみろ。集団疎開にいったら、戦争に勝つではないか？わかったか？」

みんなは半分以上、口をあけた。

「一つは、お父さんやお母さんに安心して大阪の空を守っていただくために、二つは、向こうで将来の立派な兵隊さんになる鍛練をうけるために。みんなは名誉ある出征児童になって、駐屯する」

先生の激しい訓話に、一時シーンとしていた教室は再びわきたった。

「そこでだ。どうしても集団疎開にいけない者について話す。近いうちに全員の身体検査があるが、特に体の弱い者。家の都合で田舎へ縁故疎開する者。ほかにふとんのなかで小便する者や、何か人に言うに言われない秘密がある者、例えば、デベソ」

先生がそこまでおっしゃったとき、高村君がおどろいて腹に手をあてた。

「おまえ、デベソか？」

「ちゃ、ちゃいます。失敬な。そやけど、ほんまにデベソは集団疎開にいけないッですか？」

「嘘や。嘘や」先生は笑いをかみころされ、「以上言ったようなことで、どうしてもいけない人は残留学級にはいる。そのことについては、今から配るわらばん紙にくわしく書いてあるから、今日、家に帰ったら、すぐ、お母さんにお見せすること。エエなァ」

先生は枚数をかぞえて、列の一番前の者に土色のわらばん紙を手わたされた。

「それから、ここに《疎開に来るお友達へ》という、すでに

縁故疎開をした人の作文がある。これは最近新聞にのったものだが、疎開というものがどんなものか、田舎の生活がどんなに楽しいかということが上手に書かれているから、二、三、読むことにする。はじめに六年生の女の子だ」

先生はゴッゴッした坊主あたまをゴリゴリとかかれた。

〈私はつい九十日前疎開してまいりました。すみきった空気を吸って、銀色の朝もやが光っている野菜畑に立つと、田舎はいいなぁと、つくづく思います。五月一日。五年間もいっしょに仲よく勉強したお友達と別れたときは、悲しい気持でいっぱいでした。汽車に乗っても、大阪のお家やお友達の顔が胸いっぱいにひろがって、お母さんのひざの上で泣きました。けれども、今では、田になれ、広い青田の草とりをしたり、美しく浅い小川で泳いだり、広く続いた緑の堤防で草を刈ったり、新鮮なお野菜をいただいたり、今まであまり強くなかった私も、日一日と元気に朗らかになってきました。みなさんも、一日もはやく、疎開して来て下さい。……〉

「同じく、初六の女の子。女の子でも、こんなに頑張っている。みんなは小さいが金の玉を持っている。もっともっと頑張ラナ、あかんという例だ」

〈戦争はますます激しくなってきました。しかし、日本は神の国、最後の勝をえるまでは、たとえどんなことがあっても、私たちは心を乱さずにしっかりした心と体をこの上とも、きたえなければなりません。みんないっしょに、仲よく、一生けんめい、勉強に鍛練にいそしみ、力を合わせて、あの憎い米英をやっつけなければなりません。いくら空襲があっても、私たちはびくともしません。お互いに身を守り、必ず御国のお役に立たなければならないのです。ですから、敵の空襲くらいで犬死してはならないのです。……〉

「どうだ？　このゆるぎのない大和撫子は？　最近、東条英機内閣は総辞職されたが、これは戦局に応じてであり、そこに作戦の深い意味があった。前線でも、血戦の真最中に、よく指揮官の交代があるだろう。今度の米内・小磯内閣は大和一致の精神を説いておられる。次に読む六年男の作文はその大和一致を上手に作文にとりいれている」

〈大和一致。お国のために、共に仲よく勉強しましょう。電車、自動車の音もなく、都会のにぎやかさはありませんが、緑の山を朝夕ながめ、すがすがしい空気の中で元気よく勉強し、大東亜建設のため御役にたつ立派な少国

民に育ちましょう。……〉

ボクちゃんはすっかり綴り方のとりこになってしまった。

先生は静かになった教室をにらまれ、もっとも効果のあがりそうなボクちゃんに目をつけられた。

「源。おまえは集団疎開にいくか？」

「もちろんです」

言下だった。

「わえも」

親友の朝比奈隆君も発言した。

「おれもや」

白岩君も叫んだ。

「ぼくも」

「ボクもや」

「おれも、でっせ」

真下君も高村君も久代君も湯川君も中腰になって、口をそろえた。

3

《学童鍛練展開》

学校はその日以来、大変な騒ぎだった。

人が二人よれば、おまえは集団疎開にいくのか、三人よれば、どういうふうにして親をときふせて集団疎開にいくことになったかの、自慢話で賑わった。

四年イ組の教室にも、あきらかに縁故疎開と残留を排斥するムードがあった。

ボクちゃんはそんなとき、淋しく笑って、態度を保留した。あれだけはっきり言っていたのに、お母さんの決心がきまらないことと、もう一つ、自分の体が弱いことが不安をもたせていた。この保留組にはめがね屋の小川君、副級長の小林君もいた。

ある日、三年生以上の全生徒に対して、身体検査があった。ボクちゃんの不安は頂点に達した。

御老体の清川先生が教室に連絡に来られたとき、渡利先生は、「これは、兵隊さんが入営前に受けられる徴兵検査と同じだ。静かに！」と、注意されたが、みんなは廊下にでるやいなや、しゃべり始めた。

「小林。おまえ、なッで、保留や？」

「そういう源こそ、なッでや？」

「おじいさんが死にはってッ」

ボクちゃんは淋しく笑った。

あの日、いつものように、「なッか、おくれ？」と、お三

時をねだりもせず、いきなりわらばん紙をさしだした。けれども、お母さんは永い永い間、紙を手にしたまま、おっしゃった。

「ボクちゃんは体が弱いさかい、集団疎開はあかん。それより、おじいさんに頼ッで、兵庫県の田舎に行かしてもらお」

〈縁故疎開やナ！〉

ボクちゃんは頭でひらめかせ、そして、叫んだ。

「いやや。いやや。ボクは集団疎開にいく。そやけど、今日、学校で第一番に、いきます、言うてもうた。ボク……集団疎開にいけへッかったら、嘘つきの級長になるワ」

「ボクちゃんッ！」

お母さんの声には、ウムをいわさない強さがあった。

「アホ。おッ母ぁの、いけず」

ボクちゃんは大声をだしながら、お母さんのおなかのあたりへ、ドシン、ドシンぶつかっていった。

けれども、それから、たった一日して、当のおじいさんが脳出血で他界された。翌日、人びとが葬儀に集まったとき、お母さんはおじいさんの兄さんの息子にあたるススムさんに丁寧に、しかし熱心にお頼みになった。しかし、ススムさんのこたえは、田舎にも五人の子どもがいるのに、そこへ都会から同じ年格好の子どもを四人もかかえこむのはどうだろう？　それに、田舎といっても、このごろは都会と同じように食べ物が欠乏している。食べ物のことで子ども同士が喧嘩して、親までいやな思いをするのは、ごめんだね。と、いつわりのないところをはっきり言われた。順ちゃんは一年生で、恵ちゃんは幼児だから疎開できないし、姉ちゃんは女学校の一年生だから生産工場へ通っている。幼児の疎開も長期決戦のかまえをとった今、時の問題だが、さしあたって集団疎開の対象となるのはボクちゃんだけだ。

お母さんは、毎日毎日、新聞に掲載される疎開関係の記事を前に、深刻に考えこまれた。

＊

いつの場合でもそうだが、戦時にあっては、国民はいっそうよい国民であらねばならない。《よい国民》はいろいろ定義できるが、朝日新聞はこの際、「政府の政策に対して、十分の理解をもち、それに心から協力するもの」をもって、よい国民の条件としたい。――朝日新聞社説

＊

縁故がいいか、集団がいいか

国は集団をすすめている

＊

いわゆる疎開について、学童の親も世間一般も「子供を安全なところへ、逃げさせるのだ」という観念がつよく、学童自身も「逃げるのだ」という気持になりがちで、何としても、逃避的な感情があふれているかにみえるのは遺憾千万である。

家屋、人員疎開が、都市防空態勢強化をがんもくとする戦闘行為であることは、当局がしばしば強調してきたところであるが、いわゆる疎開は、強健なる次期の戦闘要員を確保し、鍛練するため、これを育成するにもっともふさわしい環境にうつして、心身鍛練する意味からいって、一般疎開よりさらに一段と強力な戦闘行為というべきである。

疎開が、なぜ逃避的に解釈されがちなのか。いうまでもなく、一般に疎開の真義にてっしていないからであるが、第一に《集団疎開》なる呼称が当をえていない。私は強力な戦闘行為の一つである、この積極的な意図を表現するために《学童鍛練展開》と、よびたい。

疎開の真の目的は、あくまでも積極的な勝利の力を培養せんとするもので、そこに、この戦争の長期戦たる性格がうかがわれる。陛下からおあずかりしている御宝を立派に育てあげて、他日、醜敵撃滅の御役に立てるのだとの真義に徹し、報国の念を幼い魂にも、しっかりと刻みこませて、出陣の気持で展開させるのでなければならない。

少年の鍛練展開については、すでに古く武士道日本の歴史が訓えている。正行が桜井の里で、父正成と別れて帰ったのも、まったく、父に続き、逆臣足利勢の撃滅を期しての積極的な鍛練生活に入るためで、遊戯にも、木馬にのって、「尊氏の首をとれ」と、叫んで暮したあの敢闘精神を、今日の展開学童の念とせねばならない。又、義経の牛若丸が鞍馬山にたてこもり、天狗を相手に剣の修業をつんだのも、他日、平家をうつための積極的な鍛練生活だったのである。

今の学童鍛練展開は、まさにこの精神に他ならない。

——神宮宮司　古川左京　毎日新聞

4　身体検査

「おまえは？」

ボクちゃんはそんなお母さんの心も知らないで、ゆううつそうに小林君にきいた。

「縁故がきまりかけや」小林君がこたえた。「君やさかい、うちあけるけど、大阪の家、売って、みんなで広島へ疎開すンねッてェ」

「なッや。逃げッのッか？」
「ちゃう」
「そやかて、おとなが大阪、離れて、誰が大阪、守るねッ。そんなッ、逃げだすのッと、同ッなじや」
「うちあけたら、そう、言われると思てた。そやから、ぼく……」
「家みたいなもん、ほっとけ」
ボクちゃんは人ごとだと思って、威勢よく言った。が、自分が縁故よりなおわるい残留になるかも知れないと思うと、ますますゆううつになった。せめて、身体検査だけでも通っておかないと、お母さんに対してあれ以上強いことは言えなかった。
そこへ、高村君が近づいてきた。そして、二人に劣らないような悩み顔でつぶやいた。
「あれさえなかったら……」
「あれ……？」
「《ヘ》のつくもん」
「屁ェか？」

「ちゃう。《ヘ》と《ソ》や」
「へ、ソ！ ア、おまえ、デの字」
「コラ。大きな声で言うな」
みんなは笑った。しかし、ボクちゃんは医務室に近づけば近づくほど、笑えなかった。身体検査のときに、いつも感じるあの〈いやぁな〉ひけ目。
医務室には、白い割ぽう着のような白衣を着た水野校医さんと保健婦さんの二人が、目もまわさないで頑張っておられた。水野先生のお凸には、真中に穴のあいた反射鏡が窓の光をうけて光っていた。少し離れたところで、渡利先生が「二十五キロ」とか「三十キロ」と、どなっておられた。
みんなは、部屋のまわりに並べられた長机の上に服とズボンをぬいだ。ボクちゃんも、なるべくゆっくりとした動作でシャツをぬいだが、高村君のへそがパンツの中ごろからふくれあがっているのが見えた。ちょっと不愉快だった。
「鯛。心配すンな。先生も、あれは嘘や、言いはったやッけ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com